

メディアと統制社会の不幸

平和統一 NEWS 60 号 (2013/9 月号)

渡辺 久義

我々は自分自身のこと、自分がどんな世界に住んでいるのかということ、あまりにも知らな過ぎる。それを知っていて、我々に教えようとする親切な人々が地球の内外にあふれているのに、これを無視しているというのが、現在の我々の社会の状況である。かつてそれは宗教の役割であった。今は宗教という枠をなくして、かつて宗教が教えていたことを、もっと拡大された観点から確認できるような時代に入ったと考えてよい。

「水瓶座新時代：人類の目覚め」(New Age of Aquarius: The Awakening of Humanity) というウェブサイトも、そのような観点を提供するものの一つである。ここに筆者の名が書かれていないのは、我々地球人がどんな世界に住んでいるのかを明らかにするのが、(少なくとも現在は) 危険だからである。それは「金融詐欺」「マネー」「人口削減」「保健」「食品・飲料」「教育」「メディア」「法律」「地球温暖化」「黒い作戦」「科学技術」「生物戦争」「戦争」「権力エリート」など、多くの項目に分けて説明しているが、これは我々の生活に直接関わるすべての面で、いかに我々が、「権力エリート」あるいは「陰謀団」「黒い集団」「イルミナティ」と呼ばれる少数者の黒い網の目の中に、巧妙に捕らえられているかを説明するためである。

我々は、悪の集団が、この世界の背後から我々を操っているということ、これまで噂には聞いても、これほどきちんと説明してもらおうということにはなかった。我々を支配しているこの勢力が何であるか、その正体を知ることなしに、世の中を良くすることはできないのである。「これだけ一生懸命やっているのに、なぜ…」と、徒労感を抱く世直し運動家は少なくないであろう。悪の本質を知らずして善を追求することはできない。

このサイトの「メディア」の項目は、いかに世界のメディアがこの悪の集団の統制下にあるかを、歴史的に詳細に説明していて、ほとんどの人があっと驚くに違いない。(創造デザイン学会サイトに訳を載せておいた。)そこに、この集団の頂点的存在であるデイヴィド・ロックフェラーの、意味深い、次のような言葉が引用してある――

私たちは、ワシントン・ポスト、ニューヨーク・タイムズ、雑誌「タイム」、その他、経営者の方々が私たちの会議に出席して下さり、ほとんど 40 年にわたって、思慮分別

ある彼らの約束を尊重して下さった、偉大な刊行物に対して、心から感謝を申し上げます。…これらの年月の間、もし私たちが白日の下にさらされるようなことになっていたならば、私たちは世界に対する私たちの計画を進めることはできなかつたでありましょう。しかし世界は今、ますます進歩発展し、一つの世界政府を目指して前進する用意ができています。知的エリートと世界的銀行家の国家を超えた主権は、過去の世紀に試みられた国家的自動決定（独裁？）より、確実に好ましいものであります。

これは 1991 年 6 月、新聞関係者の前で行われた演説の一部であって、20 年以上前の発言だが、「もし私たちが白日の下にさらされるようなことになっていたならば」という言い方に注意していただきたい。これは 2 つのことを意味する。一つはいかに彼らが、ひそかに、我々民衆に気付かれぬように世界制覇計画を進めなければならなかつたか、ということ、もう一つは、そのためには、ワシントン・ポストやニューヨーク・タイムズのような大新聞の協力がいかに必要であつたか、ということである。では彼らは、こうした大新聞の協力の約束をどうやって取りつけたのだろうか？ それはカネで買い取つたのである。そのことがこの論文の冒頭に詳しく書かれているので、読んでみていただきたい。

これはアメリカだけの話ではない。「マスメディアに対する統制は世界的な現象である」と言っているように、日本でも事情は同じと考えられる（某大新聞がこの時期に「ローマ・クラブ」を紹介するなど、自由意志によるものとは思えない）。「メディアの統制は人々の考え方の統制に等しい」とも言っている。そんなことは知っているという人があるかもしれない。ではその人は、自分がどこまで統制されているのかを知っているだろうか？ 統制された状態が当たり前の常識となり、これに異を唱える人はヘンな人、もっと言えば、反社会的な危険人物となるような社会——これこそ暗黒集団の創り出そうとしてきたものである。しかもこれはメディアの世界だけでなく、メディアと同じくらい影響力（と権威）をもつ学問の世界、教育の世界も同じである。

彼らは実に巧妙にこういう世界を創り出すのに成功してきた。しかし、騙す、隠蔽、秘密主義、（カネや暗殺を含む）策謀、人間の操縦といったことがいつまでも続くように、**この世界はできていない**。そのことが「9. 11」（メディアは当然、真相を報じない）以来ますますはっきり見えてきた。このやり方は支配される側だけでなく、支配する側にも不幸をもたらすだけである。NSA（国家安全保障局）の秘密漏えい（スノーデン事件）と破れかぶれの対応（異常な監視強化や、英紙ガーディアンへの圧力など）にもそれは現れている。

ひとつ付け加えるなら、韓国や中国と同じ立場で、反日感情をあおり立てるような記事を書くのは、アメリカの上記 2 紙である。これは例えば、「イルミナティ 300 人委員会 21 項目の目標」にあるような、世界の至る所に故意に危機や不安をつくりだす、彼らの方針に

沿うものである。「ワシントン・タイムズ」はこれに対抗するために創刊された新聞である。